

## 児童の日常場面における謝罪

### —小学校低学年を対象としたインタビュー調査から—

(中間報告)

京都大学大学院 田村 綾菜  
Kyoto University TAMURA, Ayana

**【キー・ワード】 誠実な謝罪, 道具的謝罪, 罪悪感, 児童期**

**【Key Words】 sincere apology, instrumental apology, guilt, childhood**

### 問題と目的

謝罪は、対人葛藤場面において加害者が最もよく用いる言語的方略である (Itoi, Ohbuchi, & Fukuno, 1996)。なぜなら、私たちは何か悪いことをしたら謝るということを社会的ルールとして共有しており、謝罪することによって、対人葛藤が円滑に終了するからである。そうした点から、謝罪は獲得すべき社会的スキルであるといえ、私たちは、幼い頃から、何か悪いことをしたら謝るように教えられる。

このように、対人葛藤解決場面において重要な謝罪であるが、謝罪には2つの種類がある。1つは、責任を受容し、罪悪感の認識から謝罪する「誠実な謝罪」であり、もう1つは罰の回避や仲間拒否を避けるなど、何らかの目的を達成するために行われる「道具的謝罪」として区別される。5歳児ではほとんどの子どもが責任を受容するものの、罪悪感の認識が伴わず、誠実な謝罪の必要条件が整うのは6歳になってからである (中川・山崎, 2005)。

ただし、私たちは、常に誠実な謝罪を行うわけではない。誠実な謝罪が可能となる6歳児でも、親密性の高い相手に誠実な謝罪を用い、親密性の低い相手には道具的謝罪を用いることが示されている (中川・山崎, 2004)。また、大人を対象とした先行研究では、日本人成人の謝罪は内心の発露ではなく、対人関係を重視し、表面上、自分の方が社会的関係で劣位にあることを示す、という印象操作の方法として多用されていることが指摘されている (齊藤・荻野, 2004)。

このような誠実な謝罪と道具的謝罪の使い分けは、どのように発達していくのであろうか。6歳で誠実な謝罪が可能となるが、その後の児童期においては、幼児期に比べて仲間関係の比重が増大し、仲間との相互作用を通して社会性や道徳性などが発達する。したがって、道具的謝罪よりも誠実な謝罪が多用されるようになる可能性がある。他方、8歳頃、自己呈示動機が次第に顕著になり、だんだん特定の目標のために自己呈示的戦略を適用するようになる (Banerjee, 2002)、という知見から考えると、誠実な謝罪よりも道具的謝罪が多用されるようになる可能性もある。

しかし、これまでに児童を対象とした謝罪の使い分けに関する実証研究はみられない。そこでまず、本研究では、誠実な謝罪の必要条件が整った直後の小学校低学年の児童を対象に、日常場面において、

誠実な謝罪と道具的謝罪が使用されているのかどうかを検討することを目的とした。

## 方法

**対象児**：京都市内の学童保育所に通う児童 19 名を対象に調査を実施した。内訳は、1 年生 8 名（女子 6 名，男子 2 名），2 年生 11 名（女子 4 名，男子 7 名）であった。

**手続き**：対象児が通う学童保育所の一室にて，個別のインタビュー調査を行った。なお，本論文で報告する内容は，児童の謝罪行為に関する発達の研究の一部として実施されたものである。具体的な質問の内容は以下の通りであった。

**謝罪経験質問**：[〇〇くん/〇〇ちゃん] は，お友達に謝ったことはあるかな？

（以下，「ある」と答えた場合に質問）

**エピソード質問**：それは，どうゆうことがあったとき？

**謝罪時の感情質問**：謝ったとき，[〇〇くん/〇〇ちゃん] はどんな気持ちだった？

## 結果と考察

「謝罪経験質問」について，謝ったことがあると回答したのは 19 名中 15 名であった。そして，その 15 名を対象に行った「エピソード質問」では，12 個のエピソードが得られた。それらのエピソードについて，加害行為の意図の有無と物理的被害の有無によって分類した結果を表 1 に示す。

表 1 謝ったときのエピソード

加害行為の 意図	物理的被害の有無			計
	あり	なし	不明	
あり	3	1	0	4
なし	3	0	0	3
不明	0	1	4	5
計	6	2	4	12

加害行為の意図があり，物理的被害もあるエピソードは，「たたいた」，「人のものを取った」などであった。加害行為の意図があり，物理的被害のないエピソードは，「バカって言った」という言語的攻撃場面であった。加害行為の意図がなく，物理的被害のあるエピソードには，「たたかいごっこで人をこかしちゃった」，「水をこぼした」，「ドッジボールを頭とか顔にぶつけた」というものがあった。加害行為の意図が不明で，物理的被害のないものとしては，「友達をとりあった」というエピソードがあった。「けんかをした」という回答が 4 つ得られたが，けんかのきっかけが不明であり，けがなどの物理的被害を含む場合もあれば，ただの言い合いのみの場合もあることから，加害行為の意図も物理的被害の有無も不明として分類した。

「けんかをした」というエピソードを除くと，謝罪したエピソードとして，物理的被害のあるもの

が多く報告された。このことから、小学校低学年の児童にとって、被害が目に見えてわかりやすい状況でよく謝罪する可能性が示唆された。

また、「謝罪時の感情質問」に関して、謝ったことがあると回答した 15 名中、「悪いことをしたと思った」など、直接罪悪感に言及した者が 3 名、その他の回答をした者が 6 名で、残りの 6 名は無回答であった。その他の回答には、「ごめんねっていう気持ち」、「もう今度しんところっていう気持ち」など、罪悪感ともとれる回答をした者が 3 名、「ぼくがあかんかったのかな」、「こっちの水がこぼれたのかな」など、自己の責任を受容している反応が 2 名いた。残りの 1 名は、「チッ（という気持ち）」と回答した。

以上の結果より、ほとんどの子どもが誠実な謝罪について報告していたといえる。このことから、小学校低学年の児童は、日常的に誠実な謝罪をよく行っていることが示唆されたと考えられる。ただし、今回の調査の問題点として、インタビューの対象者数が少ないことや、たまたま想起されたエピソードとして誠実な謝罪が多かった可能性などがあるため、対象者数を増やしたり、教示を工夫したりするなどして、より詳細に検討していくことが必要であろう。

今後の課題として、3 年生以降の児童も含めた謝罪行動の発達的变化を検討することが挙げられる。その際、6 歳児で誠実な謝罪と道具的謝罪の使用を規定していた親密性という要因に着目することで、幼児期も含めた発達的变化を捉えることが可能となるであろう。

## 引用文献

- Banerjee, R. (2002). Children's understanding of self-presentational behavior: Links with mental-state reasoning and the attribution of embarrassment. *Merrill-Palmer Quarterly of Developmental Psychology*, **48**, 378-404.
- Itoi, R., Ohbuchi, K., & Fukuno, M. (1996). Across-cultural study of preference of accounts: Relationship closeness, harm severity, and motives of account making. *Journal of Applied Social Psychology*, **26**, 913-934.
- 中川美和・山崎 晃. (2004). 対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連. *教育心理学研究*, **52**, 159-169.
- 中川美和・山崎 晃. (2005). 幼児の誠実な謝罪に他者感情推測が及ぼす影響. *発達心理学研究*, **16**, 165-174.
- 齊藤 勇・荻野七重. (2004). 自己呈示としての謝罪言葉の実証的アプローチ. *立正大学心理学部研究紀要*, **2**, 17-33.

## 謝 辞

調査にご協力いただいた学童保育所の先生方、児童の皆様に心より御礼申し上げます。

